小 3 （新小４）	受験 番号		氏 名	

入塾試験サンプル

小３(新小４)

国　語

時間の目安：約 25 分

[ご注意]

１．こちらの「入塾試験サンプル」は、実際の入塾試験よりも問題を減らしたサンプル版となっております。
２．実際の入塾試験では、問題によってやや難易度が高い問題が出題される場合もございます。
３．解答用紙がありますので、本番と同じように解答は解答用紙にご記入ください。

誉田進学塾 Method for Essential Capability & Creativity

誉田進学塾 ism Method for Essential Capability & Creativity

1 次のそれぞれの文の――線部の、漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字で書いて答えなさい。

(1) 馬車にのせて運ぶ。

(2) 細長いひもで結ぶ。

(3) 服をきちんとトトノえる。

(4) ミヂカな人に聞いてみる。

2 次のそれぞれの文の――線部は、漢字がまちがっています。同じ読み方の正しい漢字に直して、書いて答えなさい。

(1) 新しい服を切る。　(2) 計算の答えが会う。

(3) 兄弟な力をほこる。　(4) 町の注黄通りを通る。

3 (れい)にならって、次のそれぞれの文の〔　〕の中のことばを、ていねいな言い方に直して書きなさい。

(れい) 明日は遠足に〔行く〕。▼(答え) 行きます

(1) 明日はきっと〔晴れるだろう〕。

(2) 昨日、この本を〔読んだ〕。

4 次の文の①～⑤に入るふさわしいことばをあとから一つずつえらび、記号で答えなさい。同じ記号を二回使うことはありません。

今週①兄②旅行③行ってきます。
おみやげ④何がいいです⑤？

ア は　イ から　ウ か　エ に　オ と

5 次のそれぞれの組み合わせが反対の意味のことばどうしになるように、□に入る漢字一字を書いて答えなさい。

(1) 弱い ↕ □い

(2) 右 ↕ □

6 次のそれぞれの文の□に入るふさわしいことばを、あとから一つずつえらび、記号で答えなさい。

(1) □夢のようだ。

(2) 明日の朝ごはんは□パンだろう。

ア まるで　イ まさか　ウ なぜ　エ おそらく

7 **次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。**

「きっと……何か理由があったんだよ、きっと」

アキラがそうつぶやいた。ぼくに言っているように聞こえたが、おそらく自分に言い聞かせているのだろう。ぼくらの目の前には、パーツの散らばったロボットが、ぼくの部屋の青いじゅうたんの上に転がっている。アキラもぼくも、ロボットを見つめながらマオのことを考えていた。

白木マオは、男子の中で一番おとなしくて、休み時間はきまって自分の席で一人、読書をしている。みんな、マオのことを「暗いヤツ」とかげで話していた。ぼく自身も、一人が好きなんだろうなと思っていた。

ある日、理科の授業のときに、モーターを使った犬のロボットを作ることになった。電池や回路の勉強なのに工作をするのが新鮮(しんせん)で、ぼくはすぐに熱中した。組み立てるための設計図を読みながら、パーツを合わせ、回路の線をつないでいく。わくわくしながら手を進めていたぼくだったが、だんだんその難しさに苦戦し始めた。

「これ、ここにつなげるんだよ」

一瞬、だれの声かわからなかった。振り向いて、それが白木マオだったことに気づいて驚(おどろ)いた。そんなぼくをよそに、マオは設計図(せっけいず)を指し示しながら、組み立て方を説明してくれた。初めて見る①おしゃべりなマオに驚きながらも、ぼくはマオの言う通りに組み立てを進めた。マオの説明はていねいで、先生よりも分かりやすかった。

「動いた……！　やったあ！」

スイッチを入れて、ウーンウーンとにぶいモーター音を響(ひび)かせながら、よたよた前進するロボット犬に、ぼくは感動した。初めて、動く機械を自分の手で作り上げた喜びをかみしめていた。

「ありがとう、白木くんってすごいね。なんか、ロボットの博士みたいだ」

「えっ……」

完成したロボットを目の前に、興奮気味(こうふんぎみ)にそう言うと、

マオは困ったような顔をした。そして、「別に」と小さくつぶやくと、ふいっとよそを向いてしまう。まるで、今までぼくと話をしていたことが、悪いことをしたとでもいうような雰囲気だ。

「白木くん、ロボット好きなの？」

このままマオが離れてしまいそうだったので、あわてて話をつなげようと話題を出した。すると、マオは少しとまどいながらも、こくりとうなずいた。

「うん……家で作るよ」

思い付きで投げかけた話題が、予想外にヒットした手ごたえを感じ取って、ぼくはそのままの勢いで口を開いた。

「本当に？　すごいじゃんか、今度見せてよ！」

マオが顔を上げて、そこで初めて、目が合った。その目は、暗さなんてかけらも見えなくて、※していた。気づけば、みんなで話していた「暗いヤツ」が、ぼくの中で「面白そうなヤツ」に変わっていた。

マオはロボット作りのプロだった。その証拠に、マオの部屋にはロボット工作キットの完成品たちがずらりと並んでいた。

「いつか、自分で考えた設計図で、一からロボットを作ってみたいんだ」

そう言って見せてくれた設計図は複雑で、ぼくにはよくわからなかった。学校で作った犬のロボットとはちがい、手も足も顔も動かせるヒト型のロボットが描かれている。コンパスや定規できれいに図形が描かれ、その一つ一つに細かい説明の文字が並んでいる紙面に、ただ「すごい」と思った。

「でも、うまくいくかわからなくて、作ったことはないんだけど」

「じゃあ、作ろうよ！」

「えっ？」

「作ってみればいいじゃん。せっかく設計図まで作ってるのに、やらないなんてもったいないだろ」

こうしてマオとぼくのロボット制作計画が始動した。

しばらくして、その計画を知ったアキラが仲間になった。

アキラもぼくと同じで、理科の授業でロボット作りに魅力を感じた一人だった。

それからは三人で少ないおこづかいを持ち寄って、ロボットを作るためのパーツ用の材料を買い、マオの指示のもと、必死に制作にはげんだ。ロボットを動かすために必要なモーターは高くて買えないということで、これまでにマオが作ってきたロボットを分解して、それを使った。失敗もたくさんしたけれど、三人でいると②自然と笑い合うことができた。そして、またがんばろうと思えた。

マオ、アキラ、そしてぼく。このロボット制作がなかったら、クラスで話すことすらなかったメンバーだ。内気で一人読書が好きなマオ、運動オンチだけどお絵かきが得意なアキラ、運動が好きで外で遊ぶことの多いぼく。性格がちがうから遊ぶこともないと思っていたけれど、今のぼくはこの三人でつるむのが一番楽しいと感じていた。

そうやって、ぼくらなりにがんばってきて、もう少しでマオが設計したロボットが完成するはずだったのだ。

「なんで、マオ、急に『やめる』なんて言い出したのかなあ」

アキラがしぼりだすように言う。ぼくの部屋でコロンと力なく横になっている、未完成のロボット。それを見おろしながら、ぼんやりと昨日のことを思い出していた。いつものように、ロボット制作の話をマオに持ちかけたとき、

「ロボット作るの……やめる」

マオはうつむいたまま顔も上げずに一言だけそう言うと、逃げるように走って教室を出て行ってしまった。

マオがどうしてそんなことを言ったのか、ずっと考えていた。だけど、どんなに考えても、結局その理由はわからなかった。

「だって、あんなにロボット作るの好きなのに……」

ロボット好きのマオが、あんなことを言うはずがない。それは、ぼくもアキラと同じ考えだった。

「もしかして……もしかしてさ、マオ、俺たちのこと…

…」

今にも泣きだしそうなアキラの声に、ぼくも③のどがつまるような気がした。

「……とりあえず、今日はやめようぜ」

くちびるをふるわせながら、アキラがうなずいた。そして、アキラを見送るために、玄関へ向かった。一階へ通じる階段を下りている間、ぼくらはたがいにだまったままだった。残り数段というとき、ふと声がした。何気なくその声のほうへ視線を向けて、息をのんだ。

「えっ、マオのお母さん」

ぼくの声に、アキラもあわてて下をのぞきこむ。玄関で、母さんとマオのお母さんが立ち話をしていた。

「あら、ヒロくんとアキラくん。いつもうちのマオと遊んでくれて、ありがとうね」

マオのお母さんは、ぼくたちににっこりとほほえんだ。そのとなりで、母さんがまゆを下げながら口を開く。

「白木さんの家ね、明後日引っ越しなんですって」

「えっ！」

④ぼくはアキラと顔を見合わせた。

「突然決まってしまって。二人はマオととても仲良くしてくれていたから、あいさつをしておこうと思って来たの。本当は、マオも来られたらよかったのだけど……」

マオのお母さんが申し訳なさそうに目をふせる。

「引っ越し、するんですか……」

ようやく出た声はかすれていた。マオのお母さんがさみしそうに笑いながら、静かにうなずく。その瞬間、⑤体の内側がすうっと冷たくなっていく感じがした。

「マオ……」

アキラの声にはっとなったぼくは、下りてきた階段を、急いでまたかけ上がり始めた。

「どうしたの、ヒロ！」

「ロボット持って……マオに会うんだ！」

ぼくが力強くそう言うと、困惑していたアキラも真剣なまなざしでうなずいた。どうしたらいいかなんて、分からない。でも、走らずにはいられなかった。「ロボットを持って、マオに会う」。それだけのために、ぼくは

一生懸命（いっしょうけんめい）だった。気づけば、冷たくなっていたはずの⑥ぼくの体は、燃えるように熱くなっていた。

問一　――線①「おしゃべりなマオに驚きながらも」とありますが、ぼくがそう思ったのはなぜですか。次の［　　］に入るふさわしいことばを本文中から**五字**で書きぬいて答えなさい。

> **いつも自分の席で読書をしている［　　］な人間だと思っていたのに、マオの方から話しかけてきたから。**

問二　［※］に入るふさわしいことばを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　おどおど　　**イ**　わくわく

ウ　きらきら　　**エ**　そわそわ

問三　――線②「自然と笑い合うことができた」とありますが、このときのぼくの気持ちとしてふさわしいものを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　みんなの前で失敗して、はずかしいなあ。

イ　失敗してしまったけど、みんなとロボットを作ることは楽しいなあ。

ウ　失敗を、みんなに笑われてしまって、嫌（いや）だな。

エ　また失敗しちゃったけど、笑ってごまかしておけば大丈夫だ。

問四　――線③「のどがつまるような気がした」とありますが、

(1)　このときのぼくが考えていたマオの気持ちを、**「マオは～と思っているのではないかということ」**という形で、**二十字程度**（「、」や「。」も字数に数えます）で書いて答えなさい。

(2)　このときのぼくの気持ちとしてふさわしいものを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　うれしい気持ち。
イ　かなしい気持ち。
ウ　はらを立てる気持ち。
エ　はずかしい気持ち。

問五　――線④「ぼくはアキラと顔を見合わせた」とありますが、このときの気持ちとしてふさわしいものを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　喜び　　**イ**　驚き
ウ　悲しみ　　**エ**　不安

問六　――線⑤「体の内側がすうっと冷たくなっていく感じがした」とありますが、このときのぼくの気持ちとしてふさわしいものを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　マオが引っ越しをするなんて知らなかった、だまっているなんてひどいよ。
イ　マオが引っ越しをするなんて知らなかった、そんなの悲しいよ。

ウ　マオが引っ越しをすると分かっていたら、マオのことをきらいにならなかったのに。

エ　マオが引っ越しをしたら、ロボット作りができなくなっていやだな。

問七　――線⑥「ぼくの体は、燃えるように熱くなっていた」とありますが、このときのぼくの様子について、ふさわしいものを次から**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　友達がうそをついていたことが分かって、怒っている様子。

イ　友達の事情（じじょう）を知らずに、早とちりした自分がはずかしく、あやまりに行こうとしている様子。

ウ　友達の裏切（うらぎ）りにショックを受け、それが本当かどうか確かめようとあせる様子。

エ　友達のつらい気持ちを知って、なんとかしようと必死になっている様子。

問八　この文章全体から、ぼくはどのような人物だと分かりますか。次の中からふさわしいものを**一つ**えらび、**記号**で答えなさい。

ア　周りの意見に流されず、素直（すなお）な気持ちで友達を見られる人物。

イ　活発に遊ぶのがすきで、工作には興味のない人物。

ウ　ロボット作りに夢中で、ひとりで読書をすることが好きな人物。

エ　思いやりがあり、人のためにすぐに行動に移（うつ）せる人物。

（これで問題は終わりです。）

【解答・解説】

1 (1) ばしゃ (2) ほそなが (3) 整 (4) 身近

2 (1) 着 (2) 合 (3) 強大 (4) 中央

3 (1) 晴れるでしょう (2) 読みました

4 ① イ ② オ ③ エ ④ ア ⑤ ウ

5 (1) 強（い） (2) 左

6 (1) ア (2) エ

7 問一 一人が好き

《解説》マオをどのような人物だと思っていたから驚いたのでしょうか？ マオがどういう人物なのかが書かれている部分をもう一度読み直し、問題の答えにふさわしい、指定された文字数に合うことばを探しましょう。

問二 ウ

《解説》擬態語を答える問題です。どの言葉がふさわしいのか、傍線部を含む一文で考えましょう。「その目」はどのような様子でしょうか？ また、それぞれの擬態語がどういうときに使われるのかを確認しておくと良いです。

問三 イ

《解説》気持ちを問う選択問題です。傍線部が引かれている文だけを見るのではなく、もう一度本文に戻って、「できごと→気持ち→行動・表情・セリフ」という流れを整理しましょう。今回の「自然と笑い合う」という行動（表情）は、直前を読むと「ロボット制作中の失敗」というできごとがあった中で起きているとわかります。また、その後の文には、「またがんばろうと思えた」と気持ちが書いてあることから、失敗をしてもめげずに、三人で前向きにロボット制作に取り組んでいることが分かります。

問四 (1) アキラとぼくとロボット作りをするのがいやだ

《解説》問三と同様、気持ちを問う問題です。記述は、具体的に書くことがポイントです。「三人」と答えるより

も「アキラとぼく」のように人物をあきらかにしましょう。また、指定されている文に合うように答えることに注意しましょう。

(2)　イ

《解説》選択問題の場合は、選択肢を見る前にある程度、答えを考えてから選んでいきましょう。選択肢の内容に惑わされて正しい答えが選べないことが多くあります。この問題では、気持ちを問われていますから、本文に戻って「できごと→気持ち→行動・表情・セリフ」を確認しましょう。本文中には必ずヒントがあります。

問五　イ

《解説》「できごと→気持ち→行動・表情・セリフ」に沿って考えましょう。今回は顔を見合わせた直前のセリフもヒントです。「えっ！」というセリフはどのような気持ちからのものでしょうか。

問六　イ

問七　エ

《解説》**問六・七**も、気持ちを問う問題です。前後の文を読み返し、直前のできごとを確認することは解答の一歩です。また、ほかにも同じ気持ちから発された「行動・表情・セリフ」がないか探しましょう。気持ちを考える手がかりになります。

問八　エ

《解説》問題文には解答のヒントがあります。「この文章全体から」「本文を通して」という言葉があった場合は、本文中の一部分にでてきた内容を選ぶのではなく、全体に関わる内容を選ぶことがポイントです。また、登場人物が多い場合は、それぞれどういう人物なのかつかみながら、読み進めるようにしましょう。今回は、**ア**の選択肢とも迷いますが、物語の始めに、みんなと同様、ぼくもマオのことを「暗いヤツ」と思っていることから、**ア**の「周りに流されず」という部分がちがうと分かります。